

文芸と人生 論議と青年層の動向

日比嘉高

東京府下青山に住む杉原迂生青年は、明治末のとある早春、その友人の鶴藤君、小倉徂峰君と、「理知と本能の極端に離れたる時代」に生きる「現代青年の煩悶」について議論した。鶴藤君は「無計画なる追欲的自己発展」を唱え、徂峰君は「自我主義的思想は空想であらう」と難する。迂生青年はこの時自分の考えを述べなかつたが、その後『中学世界』一三卷五号（明43・4）の「読者倶楽部」に、以上の経緯を述べつつ自らの見解を発表した。「態度の宣告（近代的青年の贊助を求む）」と題されたそれは、「計画的本能の盲動的発展」を諷い、「理知を本能の梶として盲動する」という立場に立つものであった。迂生青年はこれを唱えつつ、「日本全国、いやしくも青年のある所は大演説会を起こし、又機関雑誌を發行し、来る可き世に確定する新道德の下地を作りたい」と抱負を述べ、贊助を乞うたのである。

岩野泡鳴の「新自然主義」「刹那主義」、あるいは遠く高山樗牛の「美的生活論」の響きも聞きとれる府下の投書青年たちの一幕は、百年後の我々に明治末の思想的雰囲気をよく語ってくれる。こうした青年たちの活動を拾い上げていくことも、それはそれで興味は尽きないが、本論の課題はそうしたややノスタルジックな作業ではない。この「態度の宣告」の発表された翌月、同欄に中村天涯による「杉原迂生君足下」という反応が寄せられた。迂生青年が直接天涯青年を訪れて話し込んだ夜に約束したものだといふその記事は、かなり手厳しい迂生論への批判となっているのだが、その記事中で迂生青年の言として紹介された「僕は文芸即実行です」という一文こそ、目をとめる必要がある。いわゆる「実行と芸術」論争である。府下の投書青年たちのサークルが交わしていた議論は、単なる岩野泡鳴や高山樗牛の思想の咀嚼だったのではなく、しばらく前から「中央文壇」で闘わされ

ていた大論争に連なる論議だったのである。

「実行と芸術」「芸術と実生活」などと呼ばれる論争は、「私小説」や「政治と文学」の問題を考える過程で脚光を浴び、早くから論究されてきた論題である。この議論の代表的な達成である平野謙『芸術と実生活』（講談社、一九五八年一月）は、たとえば次のようにまとめている。「岩野泡鳴の芸術即実行論とそれにつづく石川啄木の積極的自然主義論との挾撃にあつて、「天溪・花袋・抱月らが結論した」芸術の観照性はゆるがぬわけにはゆかなかつた。自然主義文学はたじろきつつ後退し、その間隙をねらつて、永井荷風・谷崎潤一郎らの耽美主義文学や武者小路実篤・志賀直哉らの理想主義文学が台頭してきた」（10頁）。「この「実行と芸術」問題の流産が屈折し、白樺派に媒介されて、心境小説の一母胎となるのである」（109頁）。自然主義の観照性が批判され、その「屈折」を白樺派が「媒介」して「心境小説」が生まれ、また「私小説」を結果していく、というわけである。もちろんこの平野の図式は正確とはいひ難く、個別作家論の形を取った後続の論によつて、すでにその恣意性が明らかにされてきている。島村抱月を例にとりながら、「実行と芸術」の問題の出発点が、いわゆる私小説論に直結するような性質のものとは全く異質の、もつと明治的な問題意識であつた」とした和田謹吾『描写の時代』（北海道大学図書刊行会、一九七五年一月、87頁）の指摘などがそれである¹⁾。

平野の図式の恣意性は明らかとなり、個別の作家研究も深化した。しかしこの明治後半期最大の論争の一つといつてよい議論の実態については、次に述べるような先行論の偏りもあつて、実はそれほど明らかにされているわけではない。

筆者は、平野謙をはじめとする先行の論者たちが、論議のある重要な構成要素を見逃してきたと考えている。他ならぬ、冒頭のような青年たちの動向である。検討の対象を田山花袋や島村抱月などといった著名な文学者の言説のみに限定してきた先行論は、この方面を完全に視野の外に置いてきた。だが、当時の投稿論文や六号活字を通覧していくと、文芸と人生 論議 後述の理由から本論ではこう呼称する の裾野の広がりには驚くべき規模に達していたことが見えてくる。著名文学者たちの論戦の横で、その「読者」である青年たちもまた、活発な議論を繰り広げていたのである。

彼らの動向と「中央文壇」の動向との間には、切つても切れない有機的で相互交渉的な連関が形成されていた

と筆者は考えている。抱月・花袋・天溪・啄木などの著名作家たちを点でつないでゆく文学史叙述では、世代や層の間の差異と交渉がもたらす文化的変動のダイナミズムを把握しきれない。著名作家と青年層の動向を同時に視野に入れる地点に立たなければ、文芸と人生論議の総体的な構造を捉え、その諸要素の衝突と葛藤が示す歴史的な意味を理解することはできないのではないだろうか。

一、文芸と人生 論議の推移

文芸と人生 論議は明治四一年から四二年にかけて行われた論争で、その名の通り「文芸」とその担い手の「人生」「生活」との距離や密着性、あるいは文芸に「実行」が伴うべきか、などが主たる焦点となったものである。この論争勃発のそもそもの起因には、自然主義文学とその担い手たちに対する社会的なバッシングがあったといえる。「都会」裁判・出歯亀事件・煤煙事件などといった世間の耳目をそばだたせる出来事によって、社会の性的な乱れや青年の風紀問題と自然主義文学との関連づけが顕著に見られていたことは周知のところである。こうした社会的な批判に答える形で、長谷川天溪や島村抱月が発言をはじめたのが明治四一年の四月から五月頃だった。

近頃の新聞では、自然主義と本能満足主義とを、全然同一義に使用してゐるのみならず、一部の有識者間にも、両者一なりといふ見解を抱いてゐる人もある。〔…〕

先づ第一に差別すべき点は、自然主義は、文芸上の問題であつて、本能満足主義とは、人生上の実行問題であることである。 (天溪「自然主義と本能満足主義との別」『文章世界』明41・4)

同様に抱月も『教育時論』(明41・5)に寄せた「文芸上の自然主義」という談話で、「数年前流行した本能満足主義と、混同せられ易い」、「両者の相異点は、本能主義は実行の主義であるが、自然主義は文芸上の一傾向で、これは実行と直接の関係を有つておらぬ」と述べていた。問題の発端にあつたのは、古くからある 文芸対道徳の図式であった。

ここへ批判的に介入してきたのが岩野泡鳴である。泡鳴はすでに『万朝報』の素堂(「社論」明40・11・11)と論争をするなかで「僕は外界の存在を許さない唯一自己を主張するのである」(「文界私議」『読売新聞』明40・11・17)など

と述べており、天溪・抱月の姿勢を見て批判を始める。

一体、僕等の新自然主義は人生観であり、同時にまた芸術観でもあり、人生と芸術とに何等の区別を置かない程切実であるべき筈だが、花袋氏を初め、天溪氏も抱月氏もただ区別された芸術の範囲でこれを考へてゐるらしい。⁽³⁾

「文芸上」と「人生上」の分別を説いた天溪・抱月に対し、泡鳴はその一体性を主張したのである。ここに文芸と人生 論議が始まる。ただし論議といつても、実際にこの時期に活発に応酬を繰り広げたのは泡鳴と天溪ぐらゐであり、そこに抱月が自然主義の美学的価値づけをしてゆくかたわらコメントを述べ、外には徳田秋江や『文章世界』の六号活字が反応を見せる程度であった。諸雑誌・新聞に掲載された記事を見てゆくと、この一連の議論は大体一〇月頃で一旦の終息を見せるようである。これを第一期とする⁽⁴⁾。

論争第二期の開始は、田山花袋の評論が契機と考えられる。

実行上と芸術上と、自然主義に区別はないといふ説が大分多いやうだ。「……」けれど自分は実行上の自然主義といふものは意味を成さぬと思ふ。自然主義の傍観的態度は既に始めから芸術的学問的である。

(「評論の評論」『文章世界』明42・1・15)

この一月の評論のあと、同欄二月の記事で花袋は「実行上自然主義と芸術上自然主義とに就いて、大分前号の『評論の評論』が物議を醸したやうだ」とその反響を述べるが、実際この花袋論を機に四二年に入ってから論争は活発化しはじめる。

花袋「評論の評論」は、社会問題としての 文芸対道徳 から完全に切れたところで提起されたところに特徴があった。そのため、論争は第一期より問題の範囲も参加者も広汎になり、その分議論は錯綜する。『読売新聞』日曜附録「文壇無駄話」を定位置とする徳田秋江の積極的参加が目立つほか、金子筑水や田中王堂、さらに後藤宙外・樋口龍峽ら文芸革新会のメンバーなど、さまざまな人間が発言するようになる。

これにともなつて「実行」概念も多義化する。第一期において「実行」は「本能満足主義」の「実行」という文

脈を保持していた。第二期ではこの限定性が薄まり、問題は人生と文芸との関係一般や、行動というほどの意味における現実生活の「実行」と文芸創作時の「観照」との関係などに開かれてゆく。

論争の行方としては、明治四二年の第二期に入った途中から、天溪・花袋・抱月という「観照派」とまとめられる文学者たちがその態度を微妙に変えていくことが見てとれる。当初四二年一月の段階で「自分は実行上の自然主義といふものは意味を成さぬと思ふ」（前掲引用）と述べていた花袋が、「要するに、私の考では、作者が其心持を実行すると否とは、自然主義といふ上からは、（虚無主義社会主義などでは大に違ふが）枝葉論であつて、実行しやうが為まいが、さつゝいふことは作者の個人性にまかせて置いて好いことだと思ふ」（『文章講話 作者と作品』『文章世界』明42・5・1）と、以前の主張をなし崩しにするような譲歩を示すようになる。長谷川天溪も「無解決と解決」（『太陽』明41・5）で「自然主義なる語は、飽く迄も芸術上に用ゐねばならぬ」としていたのを、三月後には「例へば無理想無解決の態度を以つて芸術を製作するとせば、作家其の人の日常生活も亦、無理想無解決である。……」芸術と実行が一致すとは、此の意味に於て言ひ得るであらう」（『芸術と実行』『太陽』明42・8）と、限定を付しながらも「芸術と実行」の「一致」の地点を認めるに至っている。

天溪・花袋がこうして分離の姿勢を軟化させていったのに対し、島村抱月はあくまで「観照派」の立場を崩さなかつたようである。しかし、「実行」と「芸術」の区別は守つたものの、四二年の六月、評論集『近代文芸之研究』を刊行したその「序に代へて人生観上の自然主義を論ず」において「人生観 論へと足を踏み入れる。」「観照派」の主軸であつた抱月によるこの論の発表は波紋を呼び、文芸と人生 論議の着地点を物語るものともなっていく。この点の詳しい分析は後に譲り、ひとまずここでは「抱月の「序に代へて人生観上の自然主義を論ず」をもつて第二期が終わるということ述べるにとどめておく。

こう見ていくと、「観照派」とされる花袋・天溪・抱月らが、そろつてその主張を変化させてゆくようすがうかがえる。いったいなぜ彼ら「観照派」は、立場の「後退」とも見える変化を見せねばならなかつたのか。

この時期の自然主義の作家・評論家たちの変化については、それぞれ文脈は違つたものの、先行する論考においてもさまざまな分析がなされている。相馬庸郎「田山花袋の「実行と芸術」（注参照）は、花袋の「積極的挑戦の論理」が「無差別的肯定の論理」へと転換した原因に対道德意識やモデル問題の存在を指摘する。同じく相馬

「島村抱月」「問題的文艺」と「観照」(同前)は、抱月の転機を「建前」が強い矛盾」と「虚構論の不在」に帰す。谷沢永一「自然主義文艺批評の屈折」⁽⁷⁾も、抱月の転身を「テーマとモチーフの喪失」に求めている。それぞれに一定の説得力を持つ議論だが、こうした議論のほとんどが、それぞれの作家の論理の内部で説明されているところに問題がある。このため、結論は彼らの論説の系譜における矛盾や、伝記的な事実の参照からのみ導き出されてしまう。

筆者は、「観照派」とされる側の文学者たちがそろって譲歩をみせたという事実には、そうした個人的文脈の他に、なんらかの理由にもとづいた連関性、連動性を想定するべきではないかと考えている。そこにこそ、文艺と人生 論議を推移させた動因が存在するだろう。

二、青年たちの 文艺 と 人生

ヒントを与えてくれるのは、文艺と芸術 論議のさなかに書かれた一つの同時代文学史の記述である。岩城準太郎『増補 明治文学史』第九章「新興の文学」の第一節「思想界の新潮」は、次のように述べている。

樽牛等の予言的運動は、今日始めて鮮明なる色彩と重要な意義を有せる一般的運動となれりと言ふべし。されば自然主義は、単に文芸上の新主義たるに止らずして、又人生観上の新主義たり。此の主義や、所有伝統を破壊して後に起りし新自我の所生なれば、即ち解放せられたる新人の人生観にして、物心合一靈肉一致、自己は唯全一体として存するのみ、心性は知に非ず情意に非ず、又全一体として存するのみ、現実の外に理想なく真の外に善美なしと称する一元的新見地に立てる者なり。⁽⁸⁾

注目しておきたいのは三点である。自然主義を「文芸上」に止まらない「人生観上」のものとしていること、その人生観が「新自我の所生」であり「新人の人生観」としていること、そしてその人生観は「一致」説に従うとし、それを岩野泡鳴の用語で語っていることである。

「新興の文学」として自然主義文艺の特長を整理するこの文章は、執筆時まさに係争中であつた 文艺と人生 論議の用語を明らかに参照して語られている。「復刻凡例」にある明治四十二年三月攔筆という記述からわかるよう

に、岩城の文章が書かれたのはまだ「観照派」の勢いが衰えていない時期である。とすれば、明白に岩野泡鳴の論理の側に立つ岩城の記述は、かなり偏ったまとめ方であるといわねばならない。しかし仮にも『明治文学史』を名のる書物であり、岩城の主観一方で書かれているとも思えない。この立場をとるのには、なにかそれなりの理由があるはずである。

先の引用で、岩城は自然主義を「新自我の所生」であり、「解放せられたる新人の人生観」であると述べていた。なんらかの新しい動向の台頭を捉えてなされた論述のよつである。彼が見ていたのは、どういった存在たちだったのだろうか。

「同じく自然主義にかぶれて居ても、私は先生から教へられた通り、芸術と実行とを別々に考え度いと思ひ、佐伯はまたK先生の態度を　つまり自分に勝手な都合の好い事は之を実行し、反対に不利益と見るときは芸術は絶対に観照だと称へる、さうしたやりくちは嫌だ卑怯だと云つて、芸術と実生活とをびつたり一つに行かうとする」(『スバル』(76頁))。引用は花袋の女弟子であり、「蒲団」の芳子のモデルとされた永代美知代の「ある女の手紙」(『スバル』明43・9)の一節である。テキストが自ら示すように、「私」は美知代自身、「佐伯」は永代静雄、むろん「K先生」は田山花袋が前提されている。三者がかつて起こした衝突の主因として示されたのが、「芸術と実行(実生活)」問題に対するそれぞれの態度の不一致である。「ある女の手紙」というテキスト自体は、こうした断絶を掘り下げていく方向をもつてはいない。しかし、ここに示された佐伯の指向は興味深い。彼の主張するところは、単なる彼個人の思想的立場として片づけられるものではないようなのだ。佐伯の背後には、同じように「芸術と実生活とをびつたり一つに行かうとする」青年たちの群が控えていた。言つまでもなく、冒頭の迂生青年もその一人である。

岩城の文学史が念頭に置いていたのはおそらくこうした青年層の動向である。もちろん岩城の言つ「新人」をそのまま年齢的な若さに直結させることは慎まねばならないが、文芸と人生　論議に対する青年たちの発言を拾つていく限り、岩城の評言が彼らの方向性を踏まえていたと考えることは、それほどはずれではないように見える。彼らの言つところを引いてみよう。

早稲田文学　島村抱月の「芸術と実生活との界に横はる一線」が巻頭の論文で、大分長い。噛んでくゝめ

るやうによく説いてあるので、誰にでも解るであらう。けれどもこの説の如きものが芸術ならばどうも芸術は生温いものゝやうに思はれる。芸術はもう少し自我に痛切のものではなからうか。

（『九月の雑誌』、『文章世界』明41・9・15）

それ文芸は或る意味に於て人格の発表である。吾人は文芸上の主義と實際生活の行為とを区別する天溪氏や抱月氏の説に服する事は出（来）ない。かゝる手緩き事で果して立派な作物が得られようか、苟も真面目に文芸上の主義を奉ずる限り、その行為もこれと軌を一にするのが当然であるまいか。

（青木健作「真実なる人生と文芸の対境」、『帝国文学』明41・12）

戦慄すべき人生の真相、それが今自己人生の当面であると知つた時、人は尚ほ能くかゝる態度を持続し得るであらうか。由来人生を客観視すといふは、他面全然自己を人生より離さんとするのである。然し此の態度は、決して自己人生の当面に対する吾等の態度ではない。

（伊藤三郎「自然主義の帰嚮」、『投稿』、『文章世界』明42・2・1）

実行論者のいふところは、唯だ人生の生活者として、事ごとに、はた時ごとに、常に全力的であれ、全人格的であれといふのである。「……」斯処に於て我即人生、人生即我である。我と人生との間に、何らの隙間もなく、ギャップもない。

（松原至文「傍観と実行」、『新潮』明42・7）

人生のための芸術と云ふが如き言葉は、我等の心の直現ではない、自己の生活即ち芸術の生活である、われくは生きんが為めに生きるが如く、先天的衝動の発現によつて芸術品をなさざらんとするも得ないのである、芸術と実行とに一致あるものでなく実行即ち芸術、実行の表現は即ち芸術と云ふことになつて来た。

（井上豊果「芸術とは何ぞや」、『新声』明43・1）

発表の日付からも明らかなように、花袋、抱月、天溪らが盛んに文芸と実人生との区別を説いていたところから、青年たちはすでにそれとは違つ立場をとりつつあった。もちろん、「観照派」的な立場の青年たちもいるにはいたが、管見では「一致」説に立つ論者たちが多数派である。著名作家の論説のみを眺めていった場合、「一致（実行）

派」の岩野泡鳴の立場は、独特の、孤立したものに見えるが、実際は全くそうではない。若い世代の論を丹念に拾っていけば、「観照派」を探すがむしろ難しいほどなのだ。

花袋らの「讓歩」を生み出した要因の一つは、こうした青年たちの傾向にあると筆者は考える。先行論ではそれだけの論者における論理的破綻や道德意識からくる限界などが理由とされてきたが、それだけでは花袋・天溪・抱月がそろってほぼ同時期に変化した理由が十分に説明できない。やはりそれは、青年たちの論説群から浮かび上がるような時代的な思潮を、彼らが意識したからこそ起きた変化だったと考えるべきではないだろうか。

このことは、論争の展開と彼らの文芸メディアに対する立場との二面から説明できる。論争第二期開始の端緒となった花袋「評論の評論」発表後、第一期の抱月・天溪・泡鳴といった顔ぶれに加えて、続々と論者が参入し、激しい応酬となる。その新規参入メンバーの中には、徳田秋江や金子筑水といった「一致」説に立つ文学者も現れ、抱月・花袋らに論駁していく⁴²。一方、それと並行して今紹介した青年たちも声をあげはじめ、文芸と人生の一致をそれぞれの思いから求めていく。この過程で、筑水や抱月のような論者たちが、こうした青年たちの動向に注目し、それを分析しつつ論理に組み込んでいくといった展開が発生する。たとえば、「青壮年」「新鋭の作家」における「自己覚醒運動」と「自然主義運動」の「交錯」を指摘した、抱月「二潮交錯」(『早稲田文学』明42・4)がその例である。先に引用した花袋の「実行しやうが為まいが、さういふことは作者の個人性にまかせて置いて好い」(『文章講話 作者と作品』)という文学青年に向けた指南記事での発言は、この抱月論における「新鋭の作家等が自己胸中の鬱勃から、此の両面「自己覚醒運動」と「自然主義運動」を一つに緬ひ交ぜやうとする」と否とは、その人の自由であるが「……」⁴³という言明と非常によく似ていることがわかるだろう。花袋らの変化は、以上のような論争空間全体の展開の中で考えねばならない。

一方、文芸メディアに対する花袋・抱月などの立場にも注意しておく必要があるだろう。個々の青年の発言は、権威性や説得力において相対的に小さなものであっただろうが、この日露戦後という時代が、新聞の文芸欄が急激に増殖し、新しい青年雑誌も数多く創刊された時代であったことを忘れてはならない。青年たちが発言する場は、以前よりも格段に増加していた。しかも田山花袋・島村抱月・長谷川天溪らに関して言えば、彼らがそれぞれ『文章世界』『早稲田文学』『太陽』文芸欄の編集の責任を負う立場にあったことは重要である。特に花袋や天

深は、しばしば『文章世界』の「文叢」欄に寄せられる投稿論文の選評者の任にあたつてゐる。非掲載論文も合わせれば、彼らは当時の文壇でも、最も青年たちの意見に向き合つてゐた文学者たちだったのである。「觀照派」の論者たちが、日露戦後のメディア状況の中にどつぷりと浸かつた。浸からざるを得なかつた。者たちだつたといふ要素もまた見過ごせないはずである。

強調しておきたいのは、大作家たちと青年たちの間に見られる相互的な交渉作用である。予想されるように、青年たちは大家たちと立場を異にするとは言え、使用語彙や論理を大家たちのそれから借り受けていることも多い。たとえば、岩野泡鳴の「刹那（主義）」、「肉靈合致」や島村抱月の「懷疑」「告白」の語が顕著である¹²。大家たちから青年への影響はむしろ見やすい。ところがその一方で、今見たように、青年たちの傾向も花袋たちの論争のゆくえに見逃すわけにはいかない影響を与えていた。積極的に論争に参加し、論争空間において無視できない規模に達し、一定の風向きを形成しえた青年たちの発言もまた、大家の側へ働きかける力を持っていたのである。それぞれの層は、その層独自の論理をもつてはいるものの、独立して自律的に動いているわけではなく、相互の交渉作用の中で推移したと考えるべきである。

三、「人生観上の自然主義」という思想

では以上確認してきた青年たちの傾向は、どのようなところから生まれてきたのだろうか。彼らが大家たちとは異なつた立場を選択した、その理由を考えてみたい。

鍵は先の岩城の文学史にも出てきた「人生観（上）」という言葉にある。一致説と「人生観」を繋ぐ論理を示してくれるのが、次の『文章世界』の投稿評論である。

自然主義は、その発頭^{メタ}当時^{メタ}に於て、単に芸術上の主義として唱へられた。その後とても、その論議は主として芸術観上の論議であつた。けれども、我が国青年多数の頭は、その人生観の中に自然主義を受納すべく用意せられてあつたのである。青年の清新にして固まらざる頭は、漸やく従来^{メタ}の道德習慣なるものを懐疑の眼を以て見やうとしてゐた。人生問題を取り扱つて疲れやうとしてゐた。無理想無解決の思想

は、枯草を焼くが如く、煽々として心から心へ燃え広がった。即ち自然主義を単に、芸術観上に止まらぬ、之れを人生上に移し、はては、実行上に於ても、この主義的気分を以て行ふやうになつたのである。
る。
(谷口源吉「芸術と実行」(投稿)『文章世界』明42・8・1)

谷口の評論は、当時の「自然主義」が、青年たちにとって「芸術上」の領域に限定しえない、深く彼らの「人生」そのものに相渉つた問題であつたことを教えてくれる¹³⁾。自然主義がこうしたいわば思想的な衝撃力を持ち得た理由を、谷口は「我が国青年多数の頭は、その人生観の中に自然主義を受納すべく用意せられてあつた」からだと云つ。その「用意」として彼が挙げるのが道徳習慣への「懐疑」と「人生問題」である。

自然主義と一致説と青年思潮とが交差を見せるのは、この「人生」の問題系においてである。金子筑水「文芸と実人生(自然主義と思想界の新調)」(『中央公論』明42・5)は次のように指摘している。「実人生の真相如何、人生の真義如何。これ思想界の新傾向の裡面に横はる根本の意識的又は無意識的疑惑である。〔…〕斯くの如き思想界の新傾向と、文芸上の自然主義、少なくとも高義の自然主義文芸との間には、極めて密接な関係が有る」。ここでも「実人生の真相如何、人生の真義如何」という「人生問題」が論旨の鍵となつている。筑水もやはり、思想界における「人生」論的な風潮と「文芸上の自然主義」との間に、「極めて密接な関係が有る」というのである。

人生問題 は明治後半の青年思潮のキーワードであり、哲学、宗教に深い関心を寄せていた知識青年たちの懐疑的思想課題を総称する言葉である。谷口の引用が語つたように、青年たちにとって「自然主義」は「文芸上」の問題に限定しえない広がりや衝撃力をもつていた。そうしたいわば現代思想としての「自然主義」の性格がここでの鍵である。これは、小説ジャンルとの繋がりでのみ評論を考えたり、抱月・花袋たちの論説だけを読んでいてはつかめない、青年思想に深く根ざした問題である。それは三〇年代後半から自然主義以後へと貫いて流れる大きな潮流と関連している。高山樗牛や綱島梁川らの影響を受け、宗教熱と修養論の時代を生きながら、あるいは中学校の修身科の授業で「人格」や「自我」といった観念を刷り込まれながら、青年たちは「人生」についての問題や「自己」というものの扱いを模索していく¹⁴⁾。彼らが自然主義を受容したのはこうした受け皿の上のことであつたのだ。それゆえにこそ自然主義は、彼らにとって「人生観上の」ものでありえた。

青年たちと花袋らの傾向の間に横たわつていたギャップは、この「人生観論」「人生問題」の系譜から説明でき

る。たとえば、島村抱月がいよいよ 人生観論 へと踏み込み、「それでも尚人生の目的如何といふ問題は少しも解けて居ない。我等が嘗々として追ひ行く現在の第二義人生は、何を究極の指揮者とするか。是れが人生観論である」(5)と述懐したとき、徳田秋江は次のように嘲笑った。「吾等とても、左様な問題に就いては藤村操くらゐの年輩には、相応に頭を痛めたることあれども、今は其様な空想には耽り不申候。然るに抱月氏が、年既に四十、西洋まで行つて文芸哲学などの奥義を極めて帰られながら、今尚ほ藤村操と同じ智識の程度の空想に耽り、それが分らねば何物でも疑ふなど、いきまかれるは稍物笑ひの種と相成可申候」(6)。四〇にもなる西洋帰りが、藤村操式の煩悶を語るのにお笑いぐさだというわけである。人生問題 に関心を払わなくなった 層 が示す反応の、顕著な例と見てよいだろう。

しかし一方で、これに対する青年たちの立場は次のようであつた。

生田長江は先の秋江の嘲弄に対し、「人生の問題が全然分らないなぞと云ふのは、藤村操同然の幼稚なる懷疑であるとかなど、氣焰の俄かに恐ろしくなつたには驚く。何しろ吾々は、今以つて藤村操同然の疑惑を抱いてゐるのであるからして、何だか自分達も叱られたやうに感ぜられる」(7)『無題録』『新潮』明42・9)と自身の現在を述懐する。三井甲之もまた抱月の『近代文芸之研究』を論じて「抱月氏が自然主義を説きつゝ遂に文芸上の自然主義に止まつて、人生の悲哀を説かなかつたのは同氏の議論に力を与へなかつた所以である。けれども自家の芸術論に一段落を附けやうといつて最後に人生観上の自然主義を説いたのは、吾々をして同氏の評論の将来に対して期待の緊張を禁ずる能はざらしむるものがある」と歓迎の意を表した(『アカネ』明42・7)。こうした傾向を受けて、片上天弦は明治四二年の文壇を「人生問題中心の年」と題してまとめたほどである(『文章世界』明42・12・15)。

近頃の文壇に於いて、いろいろのやり口で人間としての自分を考へ、自分を見出して、それをいろいろの形によつて表白し、又それが為めに苦しみそれが為めに悶えてゐると思はれる。ライフの問題、ハウ、トゥ、リヴの問題、要するに自分自身の生活をどうして行くかの問題に、いくらかでも密接な関係のある現象ほど、僕には最も興味が深い。これは純然たる文学上の問題ではないと言はれるかも知れぬ。しかしながら、今の僕の心持ちでは、文学上の問題と、一般人生の問題とを、二つに區別して考へることを不満足に思ふ。

人生観 論をめぐる態度には、あきらかに世代差があった。この背景にあるのは、明治三〇年代より引き続き「無理想無解決」「幻滅時代」といった言葉が語るように、一種の社会観・世界観としてありえた自然主義は、青年層にとつては文芸の領域を超えた思想運動としてあったのである。文芸と人生 論議において自然主義が「文芸上」のものに限定されよつとしたとき、彼らが不満の声を挙げたのは当然であろう。人生 という言葉が吸い寄せてしまう問題系にこそ、青年たちが「文芸」と「実行」の「合致」にシンパシーを感じ、「人生観上の自然主義」にこだわって積極的に論議に参加した秘密があったのである。

まとめ

再び 文芸と人生 論議の行方に戻ろう。鳥村抱月が発表した「序に代へて人生観上の自然主義を論ず」や「懷疑と告白」(『早稲田文学』明42・9)など一連の 人生観論 に対する文壇の評価は、実はさほど高くなかった。恵美光山「文芸上の第一義欲」(『新小説』明42・10)が「苟も近代人文の一面を窺つた程の輩は何れも皆知る所の寧ろ陳腐な人生観」であると述べたように、それは彼の論が時代の水準を超ええなかつたためである。

しかし自然主義の理論的主柱の転身は「観照派」の敗退の印象を残し、結果的に「人生観上の自然主義」がいわば「公認」される結節点となつてしまふ。XYZ「現文壇の鳥瞰図」(『文章世界』明42・11・1)は、抱月の「序に代へて人生観上の自然主義を論ず」「懷疑と告白」を評価しつつ、「爾来、懺悔、告白、懷疑等の文字が所在に用ゐられたり論じられたりするのを見ても其の影響が少なくなつたが分るであらう。……」文壇全体が一種真摯な色を帯びて、自己告白の意義を考へるやうになつたことは争ふべからざる事実である」とその余波を語る。抱月による 人生観論 の発表は、青年思潮を体现する象徴的な言葉であつた 人生観 人生問題 という問題系に、論議の表舞台に立つただけの正統性を与え、かつそつした「懷疑」を「告白」として発表する道をも開いたのである。ここまでの流れを整理すれば次のようになる。

(1) 三〇年代から顕著になつた煩悶青年的な 人生問題 の系譜は、日露戦後の自然主義時代にまでその命

脈がずっと続いてきた。(2)そこに日露戦後の新潮流として自然主義が現れた。青年たちは自分たちの気分を代弁するものとして関心・支持を寄せた。(3)ところが、社会的な批判におされて自然主義が「文芸上」のものへと後退する気配が現れ、「観照派」／「実行(一致)派」の対立が出現する。(4)もともとが「人生問題」を基調として自然主義を受容していた青年たちは文芸と人生との一致を説く「実行派」を支持し、論争に乗じて発言をはじめるといふようにまとめられるだろう。

文芸と人生 論議は、論破という形をとらなかつたにせよ、「観照派」側の軟化・譲歩と青年たちの発言の増加によって、一致側優勢の雰囲気の中に終息した。ただ皮肉なことに、「人生観上の自然主義」が前景化されるとともに、「文芸上の自然主義」は急激にその新しさを失っていき、文壇では「自然主義以後」が語られるようになっていく。自然主義の時代は、終わりを迎えるのである。

しかし注意せねばならないのは、「文芸上の自然主義」は終息したが、「人生観上の自然主義」は終わらなかつたということである。「人生観上の自然主義」は「人生問題」を引き継ぎ、「文芸」と「人生」を一体に考えようとする思想的な枠組みとしてあつた。文学運動として理解されることのない知の枠組みとしてのそれは、自然主義以降の文学空間の基調として、文芸 文学 に関わるものたちの姿勢をしばらくの間規制しつつつけていくように見える。大正末以降に現れる「私小説」作家たちのあり方との相違については、なお考察がなされるべきだが、青年層までも巻き込んで闘わされた 文芸と人生 論議を分析することで、その枠組みの出自と構成が、まずは明らかにされると言えるだろう。

注

- (1) 他に相馬庸郎「田山花袋の『実行と芸術』」、『日本自然主義論』八木書店、一九七〇年一月、所収、同「島村抱月「問題的文芸」と「観照」」、『石川啄木 啄木の『実行と芸術』』、『日本自然主義再考』八木書店、一九八一年二月、所収など。
- (2) 論争の発端とそれからの経緯については今井素子「実行と芸術」(三好行雄・竹盛天雄編『近代文学』3 文学的近代の成立) 有斐閣、一九七七年六月、所収)の整理が詳しい。また新聞による自然主義文学(者)の表象と論争の動因との関連については、中山昭彦「芸術の成型 美術と文学」の場および抱月・花袋・天溪」、『日本近代文学』61、一九九九年一〇月)に分析がある。

- (3) 岩野泡鳴「文界私議」(中島氏の「自然主義の理論的根拠」)、『読売新聞』明41・4・26日曜附録。
- (4) 論争第一期においては、1・本能満足主義との差異化、文芸対道徳の文脈、2・「観照」論と「無理想無解決」理念との密接さ、3・抱月による自然主義的美学的追求、4・泡鳴の「肉霊合致」「刹那主義」論の提示、5・二葉亭の提起した「文芸は男子一生の事業とするに足ざる乎」との関連などが主要な関連する論題として存在した。論争の時期区分については今井素子「実行と芸術」(前掲)の考察に示唆を受けた。
- (5) 文芸と人生の呼び名も多様を極める。「芸術と実人生」「観照と実行」「文芸対人生」「観照対実行」「文芸と人生」(以上「明治四十二年文芸史料」『早稲田文学』明43・2)、「実生活と文芸」「文芸と実人生」(金子筑水)、「傍観と実行」(松原至文)、「人生と文芸」(後藤宙外)、「文芸と実行」(徳田秋声)、「実行と芸術」(田山花袋)、「芸術と実生活」(島村抱月)。
本論はこの論争と後述の「人生観論」との接続を重視しているため、文芸と人生の総称をとった。
- (6) 「人生観上の自然主義」を論じることが、すでに明治四一年九月発表の「芸術と実生活の境に横はる一線」の末尾で予告しており、抱月にとつては折り込み済の予定であった。
- (7) 谷沢永一「自然主義文芸批評の屈折」(初出、関西大学国文学会『国文学』一九六二年三月、のち『近代評論の構造』和泉書院、一九九五年七月に所収)。
- (8) 岩城準太郎「増補 明治文学史」(育英舎、明42・6、復刻修文館、一九二七年一〇月、476-477頁)。初刊は明治三十九年である。
- (9) 「ある女の手紙」については光石亜由美「自然主義の女 永与美知代「ある女の手紙」をめぐって」(『名古屋近代文学研究』17、一九九九年二月)があり、テクストの織り込んだ「芸術と実行」問題へも分析を加えている。
- (10) 「青年」を判断するに際して、年齢が判明する者については年齢を、不明者については発表欄の性格(投稿、月評欄)などから推定した。ここで青年層としてまとめて扱った集団の中にも差異を見出すことは可能だが、今回は当時の論争における大きな構図とその背後にある流れを提示することの意義を重視した。青年たち個々の輪郭をはっきりさせる試みは、本論に交差する別の問題構成として追究されるべきだろう。
- (11) たとえば、「私は大体に於て岩野泡鳴氏の説に賛成する」という徳田秋江「文壇無駄話」(『読売新聞』明42・1・24)、「実生活から離れて、果たして文芸に何等独立の意味が有らうか。文芸は飽まで実生活のためにのみ存在する」という金子筑水「実生活と文芸」(『中央公論』明42・2)。
- (12) 泡鳴の思想の受容については、たとえば石川啄木におけるそれを明らかにした鎌倉芳信「石川啄木「時代閉塞の現状」の青年像 内からの目、外からの目」(『岩野泡鳴研究』有精堂、一九九四年六月)がある。
- (13) 石川啄木「弓町より(食ふべき詩)」(『東京毎日新聞』明42・11・30)12・7、引用は『啄木全集』第四巻、筑摩書房、一九六七年九月、213頁)も、次のように述べている。「私は最近数年間の自然主義の運動を、明治の日本人が四十年間の生活か

ら編み出した最初の哲学の萌芽であると思ふ。さうしてそれが凡ての方面に実行を伴つてゐた事を多とする。哲学の実行といふ以外に我々の生存には意義がない」。

- (14) 修身教育との関連については日比「自己」を語る枠組み 中等修身科教育と 自我実現説 「『国語と国文学』」第77巻7号、二〇〇〇年七月(を参照)。

- (15) 島村抱月「第一義と第二義」(『読売新聞』明42・6・6日曜附録)。

- (16) 徳田秋江「文壇無駄話(何故に文芸の内容は実生活と一致するか)(一)(二)」(『読売新聞』明42・6・13日曜附録)。

〔付記〕本論文は科学研究費補助金(特別研究員奨励費、一九九九―二〇〇〇年度)による研究成果の一部である。